
矢車菊

一寸木 一二三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

矢車菊

【Nコード】

N9089A

【作者名】

一寸木 一二三

【あらすじ】

この自分は一体何なのだろう。目を覚ました男の前には、自分そっくりな人形が横たわっていた…。

自分が目を覚ますと、まず自分の顔が目飛び込んできた。

否、正しくはそうでない筈だが、そう見えた。胸の上で手を組み、心持ち青白い顔をこちらに向けて、白い着物の自分は床の上に身体を伸べていた。その自分を、この自分が天井当たりで見ている。黒々とした短い髪が、枕の上で所在投げに縮こまっている。

他人の空似かとも思ったが、この部屋も、すぐ側にあるマホガニーの机の傷も自分のものであるし、自分の家にそう都合よく同じ顔の人間がいるとは思えないから、この男はやはり自分なのだろう。自分の体が自分を置き去りにしていった。

これが噂に聞く幽体離脱というものなら、まるで浮気な男の言い訳か出来の悪い哲学だと、無機的な自分の顔を見ながら笑っていると、襖をすべらして、喪服の女が一人部屋の中に入ってきた。胸に赤ん坊ほどの壺を抱えている。自分はその壺の中身がひどく気になった。胸騒ぎにも似た感覚だった。

自分の位置からは、女の表情は見えず、結い上げた髪に分かれ目が、白くくつきりとあるのが見えている。

目の前の自分と同じくらい青白い顔をうつむけて、女は自分の脇に座ってその顔を見ている。その肌の艶やかさを、自分はこの世の始まりから知っている気がした。

ずいぶん長いこと見つめるものだと思っていると、女はおもむろに、目の前の自分の帯を解いて、白い着物を広げた。

衣擦れの音と共に、ややたるみかけた腹がさらされ、自分は息を呑んだ。

白い皮膚が続いている筈の腹の真ん中に、ぽつかりと大きな穴が開いていた。皮一枚の下に、たっぷりと血と臓物を詰め込んでいるはずのそこには、何の必然性も無く、明瞭に暗い穴があるばかりである。

決して人体には存在せぬその器官の暗さに、自分は、それが人形だと悟った。

寿命の切れかけた電灯が、ジジツと音を立てて点滅した。

女は壺の中に手を入れて、中のものを自分の腹の中にあけ始めた。白く、朧な光すら発しているような手から、さらに儂い白さの物体が零れて、からりからりと音を立てながら腹の中に積もっていく。自分は身を乗り出して、奇妙な懐かしさを感じるそれが何かを見定めようとしたり。細長く、口に入れて噛んだら、さくりと崩れそうな砂糖を固めたような白さであった。ある程度積み重なると、カタリと音を立てて崩れる。骨であった。

やがて、壺の中身を全てあげ終えた女は、今度は喪服の袂に手を入れ、その中のものを自分の上にまき始めた。

冗談か手妻の様に、次から次へと出てくるそれは、首から手折られた花であった。青い炎のような色をしていた。

ぽすり、ぽすりと、女の白い手に、床の上に、人形の上に、骨の上に、夜明けの空の色にも似た矢車菊が落ちた。

自分は唐突に、目の前の人形が棺であることを理解した。砂糖菓子のような骨は自分のものであった。古の少年王フアラオの幼い妻がそうしたように、女は生きた姿のままの自分を、矢車菊で葬送っているのだ。蠟人形とも、生き人形でもない、まさしく自分そのものの棺に、自分は微かな恐怖と親近感、女に対するたまらない憐憫の情を覚えた。女が花をまき終わると、幾人かの黒服の男達が現れて、自分を部屋から運び出した。

庭の早咲きの薔薇が、闇の中で臙脂色の顔を見せている。自分が埋められる黒々とした穴は、其の下に横たわっていた。

布団ごと其の中に降ろされるとき、自分は若い日に行った善光寺の胎内巡りを思い出していた。極楽の錠前に触れたかはずいに思い出せぬまま、自分の上に一掬いの土が落ちてきた。

自分の頭の中も、明かりを一つ落とすとした様に暗くなった。

先ほどの女は、少女のような黒目がちの目を伏せて、真珠のような歯を噛み締めている。

俯いた長い睫毛の間から、ぼろりと玉の滴が零れて頬を伝った

墓の中からそれを見ていた自分は、消えようとする身のこと忘れず女に見入っていた。

思えば自分は、この女をこれほどに美しいと見て見た事が無かつたらしい。磔に処された異教の神を見る母のような、清らかで悲しみに満ちた姿に、自分はまた、堪らない哀れさを感じた。これほどに不幸の似合う美しさは、ただ哀しいばかりであった、

また一掬い土が落とされた。

ふと、自分は何故死んだのか思い出そうとしたが、脳裏に浮かぶのは、妻であった女の白い手と、其処から零れ落ちるカルシウムの音、そして、薄く紫を帯びた、矢車菊の花ばかりであった。

明かりはもうほとんどきえかけてい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9089a/>

矢車菊

2010年12月16日15時04分発行